

## 仙台城跡二の丸第 18 地点現地説明会資料

平成 26 年 6 月 14 日 東北大学埋蔵文化財調査室

### 《調査要項》

遺跡名称：仙台城跡（二の丸地区第 18 地点）

調査原因：東北大学総合研究棟（国際文科学系）新営

調査主体：国立大学法人東北大学

調査担当：東北大学埋蔵文化財調査室

調査期間：第 I 次調査（1～5 区）

平成 25 年 3 月 13 日～4 月 26 日

第 II 次調査（1B 区、2B 区、6A・B 区、7A・B・C 区）

平成 26 年 4 月 1 日～6 月 30 日

調査面積：第 I 次調査＝117.4㎡、第 II 次調査＝730㎡

### ＝調査経緯＝

震災で被害を受けた講義棟を建て替える形で、総合研究棟（国際文科学系）が新築されることに伴う調査です。新築建物は、既存建物の基礎杭を利用し新たな掘削が発生しない工法で建築されるため、遺構の状況を確認する調査を実施しました。今回の調査に先立ち、平成 25 年に江戸時代の遺構面の残存状況を確認する調査を実施しています。

### ＝二の丸地区の変遷＝

東北大学の川内南地区は、仙台城跡の二の丸地区に相当します。慶長 5 年（1600）に仙台城本丸が伊達政宗によって造営された時期には、二の丸地区には重臣などの屋敷が置かれていました。寛永 15 年（1638）に二代藩主伊達忠宗が二の丸を造営し、これ以後は二の丸が仙台城の中心となります。その後、17 世紀末の大改造、文化元年（1804）の火災による焼失からの復興の際に、大規模な工事が行われ整地がなされている場所もあります。二の丸の建物群は、明治維新後も維持されますが、明治 15 年（1882）の火災で焼失してしまいます。その後、陸軍第二師団司令部として使用され、戦後は米軍キャンプを経て、東北大学川内南キャンパスとなっています。

今回は江戸時代の整地層の上面で、遺構の平面プランを確認しています。そのため、壊されて下層遺構が露出している部分を除くと、文化元年の火災以後の遺構を調査しています。

### ＝柱間寸法と基準の方角＝

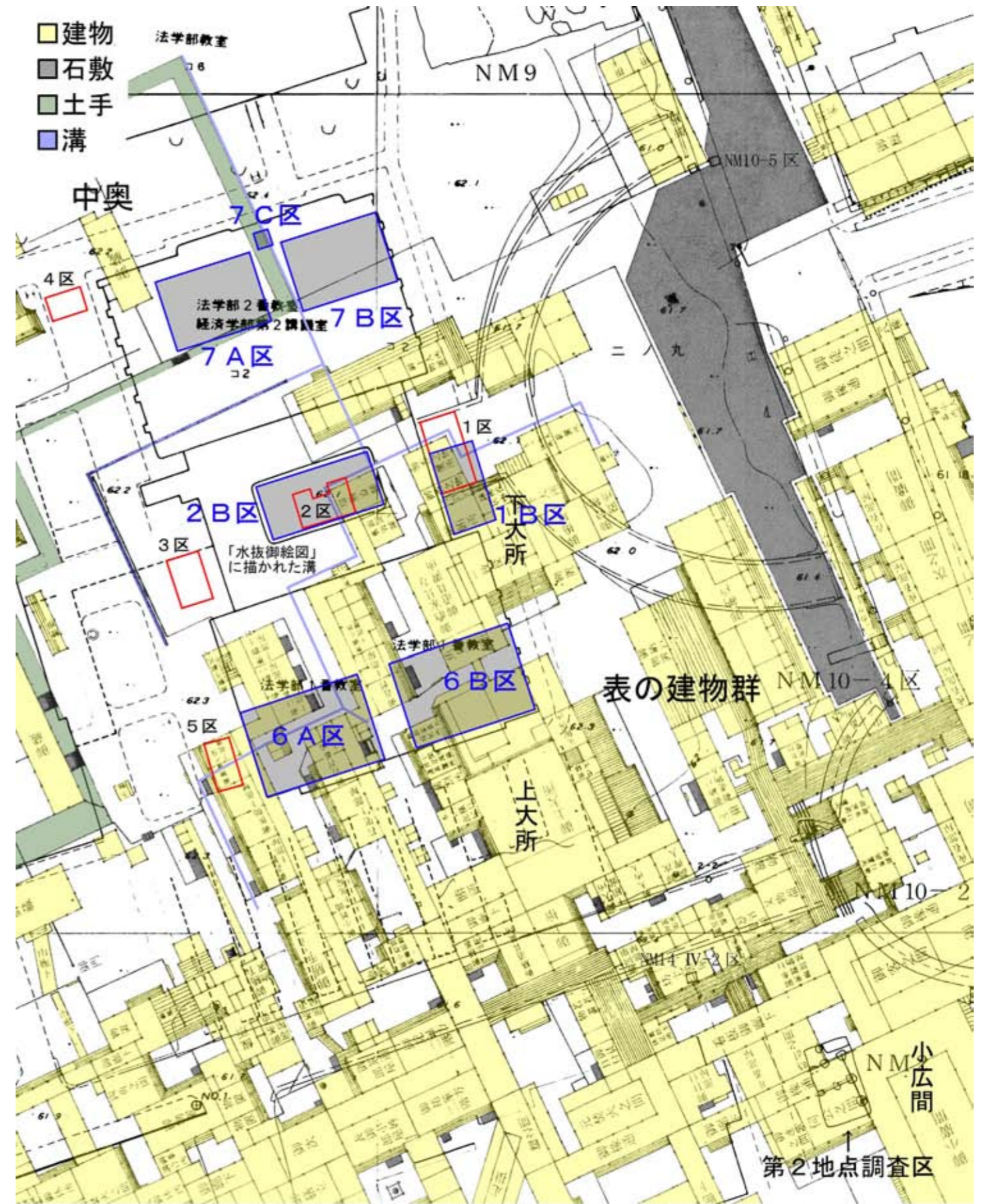
仙台藩の建物は、最初は 1 間が 6 尺 5 寸（約 197cm）でしたが、二の丸を造営する頃から、1 間が 6 尺 3 寸（約 190cm）に変化したと思われます。しかし二の丸では、6 尺 5 寸の建物と 6 尺 3 寸の建物が併存していた可能性もあります。今回の調査で発見された建物は、いずれも 1 間が 6 尺 3 寸と考えられるものです。二の丸の建物や施設は、基本的に方角をそろえて造られています。真北から約 25 度、西に傾く方角が基準となっています。

### ＝調査成果の概要＝

#### 【全体の状況】

既存建物の基礎で壊された部分以外は、建物が建っていた範囲でも良好に江戸時代の遺構面が保存されている部分が多いことが判明しました。特に 7 A 区・7B 区・2 B 区では、江戸時代の整地層が厚いため、二の丸造営以前の地表面は深いところにあります。そのため伊達政宗時代の遺構は、極めて良く保存されていると見られます。

二の丸の絵図を現状と対比させた位置関係は、これまでの調査成果から、右図に示したようになってきました。今回の調査では、「表」と「中奥」を区切る土手の位置、建物間を通る石組溝などは、ほぼ推定位置で発見されました。礎石建物跡も、おおむね絵図に記載された建物に対応すると思われます。しかし、柱の位置が正確に一致するわけではありません。絵図によっても、建物の大きさや位置が微妙に異なって表現されている場合もあり、今後詳細な検討を行って、発見された遺構と絵図の記載との対応関係を検討していく予定です。



調査区と周辺の絵図との対比（縮尺 1/600）「文化元年御造営絵図写」を使用（およその対比を示したもので、発見された礎石などと、建物の柱位置が正確に対応する訳でない。）

二の丸地区は、政務の場所である「表」と、藩主の生活の場である「中奥」に大別されますが、今回の調査地点は、

「表」の北側から「中奥」にさしかかる部分で、二の丸の「表」の「上大所」や「下大所」付近に相当すると考えられます。



【1B区・2B区】

東西方向に土管埋設による破壊があり、その北側は陸軍期に削平されています。1B区に南北方向に走る暗渠は、陸軍期のものです。

1B区では、礎石建物跡と、その内部に敷かれた石敷きなどが発見されました。石敷きの石や礎石を取り去った跡と思われるものも見つっています。建物の構造などは良く判りませんが、同じ建物の礎石や石敷きと考えられます。また、土管などで破壊された部分で、下層に大きな川原石を詰めた、礎石の据え方と思われるものが確認されています。二の丸造営時に若林城から移設された「大所」の礎石



の据え方の可能性もあります。

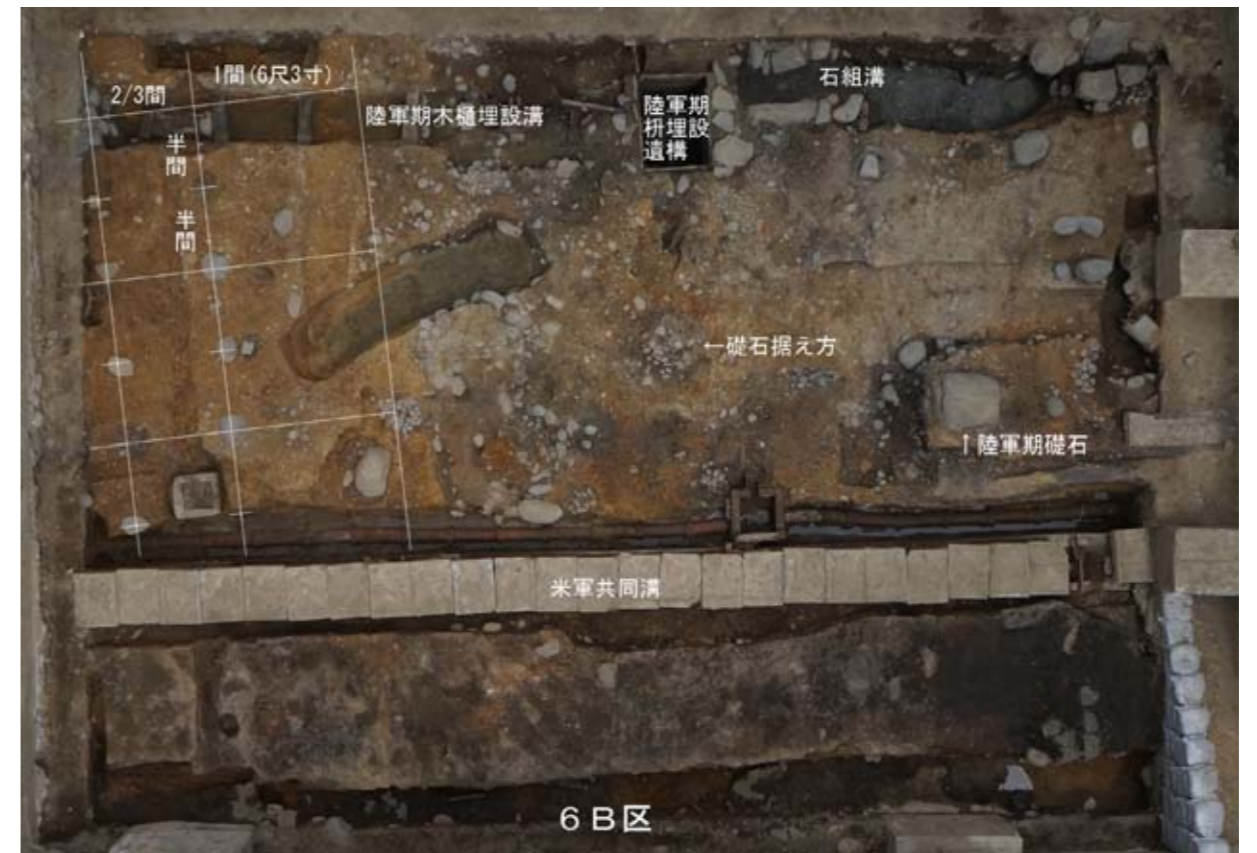
2B区では、南北方向に延びる石組溝、そこから東に分岐する暗渠、礎石建物跡などが発見されました。削平された部分では、下層のより古い時期の溝跡も発見されています。礎石建物跡の全体の様相は判明しませんが、1B区の礎石建物とは、柱間寸法が整った距離にならないことから、別の建物になると考えられます。

【6A区】

調査途中のため、未確定の部分があります。調査区南よりのところに米軍共同溝が東西に走り、これ以外にも埋設管などで破壊されている部分もありますが、保存状態が良い調査区です。北東隅に、南北方向の石組溝が検出されており、途中で西側へ分岐していきます。絵図の記載から、2B区で検出された石組溝が、屈曲してこの溝につながっていたと思われます。石組溝の南東側に礎石建物跡が確認され、石組溝との間に石列が見られます。調査区北端には、木樋を埋設した溝が東西にのびており、陸軍期のものと思われる。

【6B区】

6A区から続く米軍共同溝が東西に走り、それより北側



は明治時代以降の破壊が多く、削平されている部分も多くあります。米軍共同溝の北側に、巨大な礎石が並んでいるのは、陸軍期の建物基礎です。6A区から続く木樋を埋設した溝が伸びてきますが、木樋は取り去られているようです。その東側には、板を方形に組んだ柵状の施設が接続し、さらに石組溝が東に伸びます。陸軍期のものと思われる。

西よりの部分で、二の丸期の礎石建物跡が確認されています。東端は1間隔で礎石を据えるために玉石を詰めた据え方が確認されましたが礎石は取り去られています。内部の柱や床束を支える礎石の様子がよく判ります。中央部には、規模の大きな礎石の据え方が確認されていますが、どのような建物になるのかは検討中です。

【7A区・7B区・7C区】

第1次調査において、4区のみが江戸時代の地表面の標高が高かったことから、絵図で「土手」として表現されているものが、「表」と「中奥」を区切る段差を示すと考えられました。7A区と7B区は、この段差を確認することを目的に調査しました。「土手」の部分は調査区内では見つかりませんでした。二の丸期の地表面の標高が、7A

区が高いことから、この部分が一段高い「中奥」にあたると思われます。7C区は、既存建物の基礎撤去の際に石組溝が発見されたため調査したものです。「土手」の下に造られた溝と考えられます。

＝出土遺物＝

確認調査のため、ごく一部を除くと、江戸時代の遺構を埋めた土は掘っていません。調査で掘削したのは、明治時代以降の地層だけです。この明治時代以降の地層に、江戸時代の遺物が混じっており、江戸時代の各時期の、陶磁器・瓦・木製品・金属製品などが出土しています。陸軍時代の用地境界石も出土しています。

＝まとめ＝

二の丸の表の礎石建物がまとまって発見されたのは、1983年の第2地点の調査以来のことです。二の丸地区の建物群の実態解明の点で、貴重な成果となりました。絵図に描かれた施設との対応関係も明らかとなり、二の丸の「表」の主要建物について、その位置を推定できるようになりました。また、二の丸地区の遺構が、良好に保存されている部分が多いことが明らかとなりました。